

収蔵品レスキュー活動の概要―美術館部門

佐藤 美子

美術館部門は、グラフィック、写真、漫画、映画、映像の分野と、市ゆかりの作品を扱う美術文芸がある。映像資料は3階にあって被災しなかったものもあるが、多くは地階収蔵庫にあって被災した。最初に収蔵庫から搬出をしたのは、特に水に脆弱な写真作品と映画フィルムだった。搬出の経路が南側となったため(図面参照 七頁)、水溶性のゼラチンが使用されていること、一人で持てる大きさであること、一番手前の収蔵庫ですでに扉が開いていたことなどから、照明がなく、床板の張り替えも完了していなかったが、第九収蔵庫の三五mm映画フィルムと第八収蔵庫の写真作品は安全確認後すぐに運び出しを開始する。写真は日本大学芸術学部と東京大学史料編纂所、映画は国立映画アーカイブを中心にご協力いただいた。映画フィルムは、館内での処置が技術的に難しいため、取り出すと同時に外部のラボに搬出したが、写真については、館内でできるものについては応急処置を施した(図1)。

一番奥の美術文芸の第四収蔵庫と、額装された大型作品の多いグラフィックの第七収蔵庫からの作品の搬出は、作業場までの安全な導線とその導線上の照明が不可欠である。庫内の机や倒れた棚など収蔵品以外で動かせるものを除去し、床下に残った水の排水作業など、全国美術館会議、国宝修理装演師連盟、文化財保存支援機構(JCP)を中心とした外部支



図1 | 写真作品の洗浄

援団体による収蔵品レスキューが本格的にはじまる令和元年一月一四日にぎりぎり間に合わせることができた。

キャンバスの油彩画、彩色された素描やリトグラフなど、額箱、額縁や布袋などを外し、板張りであれば板からはがして「まくり」の状態にしてすばやく乾燥させることが、最初で最大の処置である。そのために額をのこぎりで解体したり、大きな水槽に引き出しごと水に入れて一枚ずつ剥離したりすることもあった(図2)。

二階展示室の床面全体をブルーシートで覆い、その上に巻ダンボール、さらに不織布を敷き、作品の固着を防ぎながら乾燥させた。展示室の広さがあるとはいえ、床面積には限りがあり、その後も作品が常に移動をすることを鑑み、ロールボックスに板ダンボールと発砲スチロールの棚や、鉄パイプにキャスターを付けたものなどを作った。

乾燥した作品は燻蒸して保管する。燻蒸で使用するガスの種類にもよるが、一定の温度が必要である。最初の燻蒸は一二月、これは外部施設で実施した。三月から空調のある一階ラウンジを事務所から燻蒸庫にかえ、気温が上がった五月には企画展示室に一〇m四方の燻蒸庫を二基作り、大型の収蔵品を燻蒸できるようになった。

令和元年一二月に完成した中庭二階建て仮設ユニットハウスは、二階を作品の乾燥場、一階は燻蒸後の作品の保管庫とした。さらに一階の廊下部分はカビ払いの作業場にして、ドライクリーニング・ボックス(図3)を設置した。カビは燻蒸によって無害化したものの粉塵としての害は残る。ミュージアムクリーナーで吸い取るが、窓と排気ダクトによって安全性を確保した。このボックスに入らない大型作品は、室内に壁を建て、保管庫のなかに専用のス

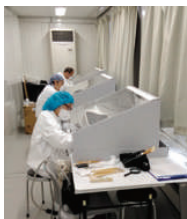


図3 | ドライクリーニング・ボックス



図2 | 剥離の様子